

## 窓

論説委員室から

## 麻生首相と捕虜問題

太平洋戦争中、米英、オーストラリア、オランダなど元連合国軍の多くの兵士が旧日本軍の捕虜となった。その数は十数万とされる。

戦後、彼らと会い、和解しようとした旧日本軍兵士がいた。90年代以降は英国やオランダに駐在する外交官、さらには戦争捕虜研究会といった市民団体も、歳月を経てなお心の痛みを抱える元捕虜たちの体験談に耳を傾けた。

藤崎一郎駐米大使が5月末、フィリピンで捕虜となった元米兵たちに謝罪の意を表したのは、そうした努力が今も続いていることの表れだろう。テキサスで開かれた元捕虜や家族の会合で、大使は「大きな損害と苦痛を与えたことに心からのおわびを表明します」と語った。

6月に来日した豪州人の元捕虜ジョー・クームズさん(88)の場合、和解は半ばで終わってしまった。

クームズさんは42年2月、シンガポールで旧日本軍に捕らわれた後、輸送船で日本に運ばれ、麻生首相の父が経営した旧麻生鉱業の炭鉱などで働かされた。

クームズさんは福岡を訪れ、住民と思いつく出を語り合い、民主党の鳩山代表とも会った。だが念願だった麻生首相との面会は果たせなかった。クームズさんは会場で「残念です」と語った。

クームズさんが謝罪と補償を求めていることがハードルとなったのだろう。だが、たとえそうであっても、元捕虜と話し合う度量を麻生首相が示せなかったことが残念でならない。

〈協阪紀行〉